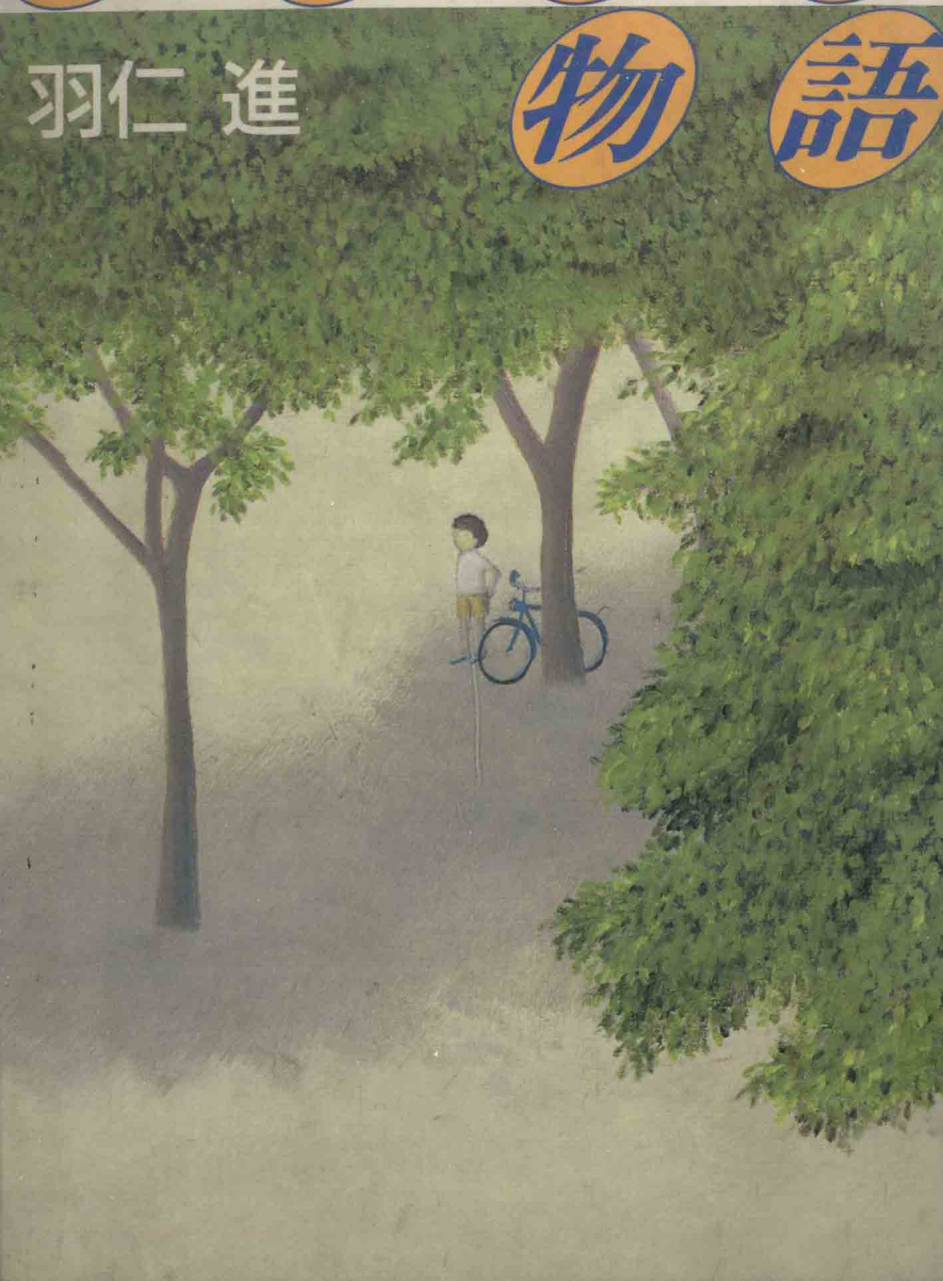
自由学園物語

羽仁進



自由学園物語

羽仁 進

自由学園物語

昭和五十九年七月二十五日　第一刷発行　昭和五十九年十月十五日　第三刷発行
著者——羽仁　進
定価——一〇〇〇円
装画——谷内こうた
デザイン——山岸義明
本文さし絵——古川タク
© Susumu Hani 1984, Printed in Japan

発行者——加藤勝久　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三—三　郵便番号二三
電話　東京(〇三)九九五—二二一（大代表）　振替　東京八—三九三〇
印刷所——慶昌堂印刷株式会社　製本所——株式会社堅省堂
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。（学二）
ISBN4-06-200712-6 (0)

自由学園物語　目次

第一章　入学、これはこまった

ある雪の朝のできごと　12
はじめての入学試験　12
緊張の瞬間　13
二つのキューピーさんに隠されたなぞ　16
一体、どこがちがうのか？　17
そっくり同じなキューピーさん　18
われながら感心した一つの提案　19
これはこまった、マークがない　20
「金づち、貸してください」　20
ぼくはきっと、一番だ　21
だんだん不安になってきた　22
「もう、うちに帰りなさい」　23
おばあさんがすっとんできた　24
ぼくのおばあさんは「羽仁もと子」　25
動物園に女がきた！　26
日本初の女性記者誕生　28
おじいさんも変わったひと　29
二人は小さな雑誌社をつくった　30
おばあさんは日本女性に強い不満！　31
自由学園創立　32

学校に食堂をつくる！ 33
下手でもできる家事があるはず 34
一つの社会として生活し、思想する学校 35
牧歌的な新しい自由学園が完成 36
いよいよ自由学園初等部、入学 37
赤松の林を通り抜けると、そこは自由学園 39
叱られて泣きだした宮崎君 39
自立心を育てることをモットーに！ 41
一日のはじまりは、朝のデンマーク体操 42
泣きたいくらい情けない！ 44
食堂で食べる手づくりの昼食 45
「ヨクミル　ヨクキク　ヨクスル」 47
二に二を足せば四になる 49
考えれば考えるほど、わからない 52
図々しい馬 54
まだまだ数学はわからない 56
おそろしい想像がふくらんでいく 58
ぼくは数学が大好きになった 59

第二章　初恋、いつのまにか

蟻の観察 62
朝から晩まで蟻のとりこ 63
ぼくは登校拒否児童！ 64
ムシの世界が心のなかに大きくひろがる 66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジュラ紀の原始林を行く巨大な竜 67
とうとう、先生に見つかった 68
「ちょっとおなかが痛かったもんで」 69
「先生、ウンコ、もりそう……」 71
いつのまにか、登校拒否はなおった 73
一頭のロバがやってきた 75
ロバを飼うためなら、なんでもするさ 76
さあ、いよいよ飼育がはじまるぞ 78
名前は〝パッツィー〟 79
ついにやったぞ、意気投合 81
固いものにけつまずくのは、大きらい 84
太ももに残った傷あと 87
パッツィーの死 89
むなしい朝 90
土曜日は特別な日 91
野外写生は個性を生かす美術教育 92
描き主のいない不思議な〝一枚の絵〟 94
さあ、上野動物園に遠征だ！ 96
ぼくは、百獣の王ライオンを描くぞ 97
尻尾の先の黒い玉はなーに？ 98
金星の夢は、はかなく散った 99
配達された一個の無気味な贈物 101
「わっ、オオサンショウウオだ！」 103
オオサンショウウオの生態 106
「やった、蛙をパクリと飲みこんだ」 107
タライから水槽へ 108
ライオン兄ちゃんの適切な助言 109
無事に冬を越すことができた 113
ぼくは、急性肺炎で危篤状態に 114
ぼくのかわりに死んでくれたのか 116
ミミズクと烏 117
うさぎの委員に任命された 119

異常事態、発生 122
とうとう、うさぎが死んじゃった 125
精も根も尽きはてて、しばし茫然(ぼうぜん) 127
期待はずれの農事試験場 129
みんなのきびしい責任追及の眼 131
最悪の夏 133
〝どもり伝染説〟 133
おまえのいうことは、さっぱりわからん 135
どもりを背負って生きていく 137
〝おばあちゃん学校〟の効用 138
ぼくは、言葉を惜しむ文が好きだ 142
初恋の相手は、カモシカみたいな女の子 144
彼女の前ではどもりたくない！ 145
久しぶりに感じる幸福感 146
夕日がこんなに美しいなんて…… 148
はじめて覚えた言葉は「ジョン」 149
いつまでも心に残る〝シロクマ〟の話 150
子どもは読んじゃいけないの？ 152
『資本主義とインフレーション』で腹痛 153
警告！「本を読むな」 155
大人気、『怪人二十面相』 157
書斎に響く無気味なセンベイの音 158
『戦争と平和』を読んだのが失敗のもと 160
父がくれた『マテオ・ファルコーネ』 160
一所懸命生きる父の秘密は、ぼくが守る 162
カッとすると前後を忘れる父 163

第三章　進学、やってみなけりゃ

男子部に進学すべきか、否か　166
坊主と半ズボンとまん丸い帽子　167
自由学園男子部、入学　169
自主性を養う東天寮（とうてんりょう）　170
炊事・掃除・洗濯にはお手あげだ　172
自給自足の寮生活　174
豚はさすがにこわかった　177
酔っぱらった巨大ウナギ　178
不思議、不思議、机と椅子がない　181
これは、えらいことになった　183
理屈と実践、やってみなけりゃ……　184
「君、なにをつくるつもりだね」　185
工場は生徒たちの自由研究の場　189
こわくてきびしかった宮島（みやじま）先輩　191
「自由学園的」という言葉　192
さあ、いよいよ作業開始！　193
半分ふてくされ、そして開きなおった　195
心のなかで覚悟をきめた　197
若き男子部のホープ〝續（つづき）木君〟　198
やっかいどころか、危険このうえもない　200
怒（いか）れる大河　202
九死に一生を得た　206

童話の主人公になった気分 208
とうとう、砂防に成功した 208
〝晴耕雨読〟が農場での生活パターン 212
とにかく、むちゃくちゃな食事当番 214
傑作、紅生姜事件 217
梅雨どきは雨でもよろこべない 219
那須の農場に季節はめぐる 220
大成功をおさめたピーナッツ栽培 222
牛が突進、「ワーッ、逃げろ！」 222

第四章　旅立ち、ありがとう

太平洋戦争勃発！ 240
ミセス羽仁のくだした決断 241
ものすごい〝教育〟 224
「梅干しばばあ」に見る愛校心 225
「身体を動かすことは美しいことだ」 226
下手でも、いやでも不参加は認めない 230
生活の時間割という方法論 230
さかんに行なわれた音楽会 232
あなた方は私の先生だ 234
ユニークで楽しい合同食事会 235
世の中に対する憤りが爆発 243
軍人の態度に大きな矛盾 244

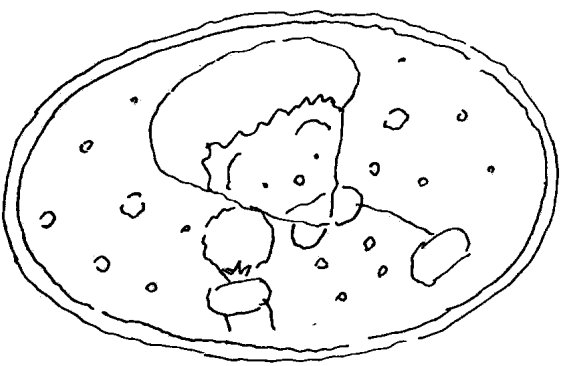
いわれなき差別の重み 246
紺碧の空に散った孤独な一つの生命(いのち) 247
「生」と「死」、その刹那(せつな) 250
自殺の真意はなぞのまま 251
僕らの力ではどうにもならない 252
自由に買えなくなった汽車の切符 254
僕は忍耐力で勝負する 256
自由裁量権はどもりの僕を救ってくれた 259
生徒たちのユニークな研究発表 261
ライオン兄ちゃんの妹は立派な科学者 263
いかに効果的に伝えるか 266
地方新聞の研究が一つのきっかけを 267
中国に向かって旅立っていった父 268
「このひとは、軍人の親方だよ」 269
頑固なハリネズミ作戦 271
世の中全体が、鈍感だった 273
ネズミも生きるために必死の努力 274
哀れな中学生の努力は徒労に終わった 276
〝地獄の世界〟と化した無惨な浅草 277
いちかばちか、改札口やぶりに挑戦だ 280
桐生のひとたちの心暖かい歓迎に大感激 281
戦争が終わった 283
選挙によせられる大きな期待 283
七年生が意図する学園改革の思わく 284
おかしな論理 287
「机の上の勉強も必要なのだ」 288
いよいよ、改革研究開始 289
マルクス主義の講座を設けてほしい 291
委員長に当選、さあこれからが勝負 293
「私(わたし)」と「父さん」 293
「建学の精神」と「自由の再発見」 296
生徒はみんな、自分の子ども 298

水と油の仲 301
改革が必要なのは、あなた方自身 301
「魚の目」というアダ名の彼女 304
じつにあっけない幕切れ 305
僕は規則を無視する不良少年 308
ある少年の退学 309
深刻な就職問題 310
僕は現実的な仕事には向かないと思った 311
なんの感慨もなく卒業——十九歳の春 312
共同通信社に入社 313
帝銀事件に見た恐ろしい光景 313
僕の書いた東条英機（とうじょうひでき）の記事がスクープに 315
映画修業のはじまり 316
思い出深い台湾出身の彼との再会 318
自由学園よ、ありがとう 319
あとがき 322

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自由学園物語

第二章　入学、これはこまった



ある雪の朝のできごと

家を出るときから、ぼくの気持ちは高ぶっていた。雪の降る朝だったが、寒いどころか、顔がカッカとほてって、どうにも落ち着かなかった。ぼくは極度に緊張していた。

そこは、おじいさんとおばあさんが住んでいるところでもあったが、その日ばかりは、まったく別の世界のように思われた。

ぼくと同じように入学試験を受けにきた子どもたちが何人か、入室を待っていた。

ぼくは、熱くなった顔をひやそうと、積もった雪をかき集めて、野球のボールくらいの玉をつくり、頬にあてた。ひんやりとして、気持ちよかったが、入れこんだ気持ちは、容易におさまらず、じっとしていることができなかった。

ふと、妙に落ち着きはらった子が目にとまった。ちょっと憎らしくなって、手にしていた雪のボールを、その子めがけて投げつけてやった。肩のあたりをねらったつもりなのに、表面が溶けてびしょびしょになった雪の玉は、その子の横ッ面にもろに当たった。しぶきがとび散った。

彼は火がついたように、大声を張りあげて泣きだした。

ぼくは大目玉をくらった。

はじめての入学試験

ぼくは幼稚園に行っていなかったので、その日の自由学園初等部の入学試験は、いわば生まれてはじめての社会体験だった。だから、待合室に入ってからも、いても立ってもいられないような気持ちだった。

一人ずつ、名前を呼ばれて、試験室に入っていく。しばらくして、その子が出てくると、また別の子が呼ばれる。さっき、ぼくに泣かされた子も、試験室に入り、そして出てきた。やはり、落ち着きはらった態度で、ぼくをひややかな目で見ながら、帰っていった。

「あいつは、きっとぼくのことを先生に告げ口したにちがいない」

そう思うと、ますます落ち着けない。ぼくは名前さえ呼ばれずに、追い返されるのではないかと、不安で不安で、どうせなら、自分のほうから逃げだしてしまったほうがいいのではないかとも思った。

「はにすすむ君――」

自分の名前が呼ばれたときですら、それが他人の名前のように思えてしかたがなかった。ぼくは、おそるおそる試験室に足を踏み入れた。

緊張の瞬間

ただっぴろい板ばりの部屋だった。机や椅子がまわりに押し寄せられていた。真ん中にぽっかりと大きな穴があき、さらにその真ん中に一つだけ机が置いてあって、三人のおとなが座っていた。

「こっちへきて、そこに座りなさい」

入口にぼんやりとたたずんでいたら、入口に一番近いところに座っていたいくらか若いひとが、机をはさんだ向かい側の小さな椅子を指さしていった。

「はにすすむ君」と呼ばれはしたが、本当に自分の番なのか自信がなかった。名前を呼ばれて立ち上がったのはぼくだけだったので、まあ、いいだろうと、意を決して、指示された椅子のところまで行って、座った。

「すすむ君だね」

顔をあげて真ん中に座っているひとを見て、ぼくは仰天してしまった。返事をするのも忘れ、あっけにとられて、そのひとの顔をじっと見つめた。

両隣りの若い二人より、ひとまわりも、ふたまわりも大きなひとだった。黒い洋服をぴしっと着て、背筋をピーンと伸ばし、いかつい口髭をはやしていた。きっと、このひとがこの世の中で一番立派なひとではないかと、ぼくは思った。

こんな立派な先生が、にこりともせず、いかめしい顔をして問題を出すのだから、相当にむずかしい問題にちがいない——。ぼくの緊張感は、一段と高まった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com